

神戸女学院大学アッセンブリーアワー

2003年度 創立者記念日記念礼拝

時 5月23日(金) 10:20-11:10.
所 E.W.スミス 記念講堂.

司会・松田英先生、奏楽・片桐聖子先生、記念歌伴奏・澤内豪先生、構成・神戸女学院史料室...

絵と歌による追認と讃美

「創立者の衣鉢を継いで歩む」

— KC 2003 AD —



創立者来日120年



キャンパス移転70年



デフレスト先生帰天30年



1. よき おとづ れを たず - さ-え て - な
2. 「かみのじ あいを身 に - 受-け て - お
3. 世の なみかぜのせま - ん-日 は - ゆ
4. せい紀の みし目二せ ん-ね-ん に - か
5. しんりを たずね 知恵を も-とめ - と



1. みじを 継え-て 来 た ひ と び-と の
2. みなごたち-よ おじまど わ-ず に
3. くえをしめ-す 主の み手 に-よ り
4. ぜえたとし-は ひやく にじゅうごねん
5. もにまな-ん-で かみと ひ と-への



1. おおき なあ-いを 受 け-て - 建
2. こうべを あ-げて 立 て-」と - う
3. はるかにう-えを の ぞ-み - 衆
4. あらたにに-じを あお-ぎ - あ
5. おおき なあ-いを そだ-て - 後



1. て ら れ た こ の ま な び や -
2. た い つ ぎ こ の ま な び や -
3. り 切 つ て こ の ま な び や -
4. め み つ て こ の ま な び や -
5. び た と う こ の ま な び や -



6. 神よ、私たちのこのまなびや、神戸女学院を祝福してください。アーメン

1. よき音信をたずさえて

道路を越えて

来た人びとの

大きな愛を受けて

建てられたこの学舎

2. 「神の慈愛を身にかけて

女子たちよ

抱きまどわずに

顔をあげて立て」と

願い継ぎ、この学舎

3. 世の疾風の迫る日は

行く方を示す

主のみ手により

はるかに上を望み

乗り切つて、この学舎

4. 世紀の節目2000年に

かぞえた歳は

125年

新たに虹をおおぎ

歩み継ぐこの学舎

5. 真理をたずね知恵を求め

ともに学んで

神と人への

大きな愛を育て

飛び立とう、この学舎

6. 神よ、私たちのこの学舎

神戸女学院を

祝福して下さい。アーメン。

神戸学院大学 アッセンブリ-アワー
2007年度 創立者記念日 記念礼拝

はいの讃美歌:

讃美歌 21 402

宣教への派遣・伝道
いともとうとき

(1502)

今日の聖書:

1. マタイによる福音書11章28~30節.

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとにきなさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜なものである。わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたは安らぎを得られよう。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

2. マルコによる福音書16章7節.

それ以外、イエスは言われた。「全世界に行き、すべての造りだされたものに福音を宣べ伝えなさい。」

祈り: 2007年度 創立者記念日の礼拝を文字にあたって。

今日の主題: 「創立者の衣鉢を継いで歩む」— 詩と歌による追認と讃美—

今日の讃美歌の原曲

Katherine Hankey.
Refrain added.

I Love to Tell the Story

Hankey. 7&7&5. D. with refrain

William G. Fischer.

Miss Talcott の愛唱讃美歌

原 題

1. いつくしみいさ 主の手にひかれて
この世のたびいそ あゆみぞうれし

〈おりのえし〉

いつくしみいさ 主のともとなりて
みちにひかれつ あめのにほひゆかん

2. ゆきなやみ坂も おちかへさ谷間を
主の手にまがりて 守けく過さずし

3. 世のたびいそ 主の河に行くも
おそれなく渡らん 主の手にまがれん

(新編讃美歌に倣ふ)

参考: 「讃美歌」294, 「讃美歌」21, 461.

記念歌斉唱

Beauty Becomes a College

C.B.DeForest (1879 - 1973)

Music by Takashi Sawauchi

Music by Takashi Sawauchi

$\text{♩} = 96$

Beau - ty be - comes a col - lege Glo - ry be - fits a soul —

God - made and man - made Grows the ra - diant whole —

Beau - ty be - comes a col - lege Mold in steel — and stone —

To - wer and arch and pil - lar Wis - dom ac - claims — her own —

Beau - ty be - comes a col - lege Fruit of bulb — and cone —

Rocks, ra - vines, and vis - tas, So is her gar - den grown —

Beau - ty be - comes a col - lege Hearts of age — and youth —

Warm with the love of ser - ving Eyes a - light — with truth —

Beau - ty be - comes a col - lege Glo - ry be - fits a soul —

poco ril - - a tempo

God - made and man - made Grows — the ra - diant whole —

詩篇合誦、五十二默禱

まはわが旅者なり。われえしこ
 こにあのじ。
 まはわれおそじの野に伏せ、
 いこいの河(おそわ)にともない
 にもう。
 まはわが魂を語かし、おちのゆ
 りをもち、われを正し道に
 おちびさたもう。
 たといわれおのの言の言をゆひ
 とも、おどわらせ給へじ。河
 われと共にいふそはなり。河
 の菰、河の萩、われをたぐさ
 ぬ。
 河、わが仇の前にはわがたに尊
 せ給け。わが腹に油をえそご
 にもう。わが杯はあふふそな
 り。
 わが世にあらんもさなり、おち
 けり。わが心はこころなり。われにそ
 いしたらん。われはこころに
 主の宮に住まん。

2003年度創立者記念日記念礼拝講演録

前掲プログラム「今日の主題」より 創立者の衣鉢を継いで歩む

若 山 晴 子

〈オルガン奏楽〉

おはようございます。

今年、2003年、神戸女学院は創立128年を迎えますが、今年は実は、創立者来日130年を祝うべき年でもありました。130年前、1873年3月末に神戸にやって来た二人のアメリカ人独身婦人宣教師、ミス イライザ タルカットとミス ジュリア エリザベス ダッドレーが、ほかの宣教師たちと同様に、自分たちがキリスト教によって得た人生の安心とよろこびを、まだ見ぬ人たちにも分かちたい、そしてそれがキリストの神のおのぞみでもある—と信じて、太平洋の荒波をほぼ1か月かけてこえてきたということ。そこで、その次第に、今日はまず、はじめの讃美歌、聖書、そしてお祈りで触れていただきました。

この讃美歌は、作詞者も作曲者も、ミス タルカットと全く同世代の人で、またこの曲が作られた1869年は、ミス タルカット、ミス ダッドレーを送り出したアメリカの伝道会(ABCFM)が日本伝道に着手した年でもありますから、殊更にご縁が深かったようです。歌詞は日本語の方が直截的^{せつ}でわかり易いようにも思えますが、原詞、今日のプログラムの右頁の上段をご覧ください。一節に三度も I love to tell the story とくりかえして、イエスの栄光と愛、救いのメッセージを、語りたい、語りたい、語りたい...と熱っぽくうたいあげて、ドラマティックでさえあります。そしてこの当時出来たてのこの歌は、この学校の出来たての頃から歌いつがれて、今日に及んでいます。そこで、昔の人を偲んで、英語の方も歌ってみましょう。1節、3節、4節。おさしつかえなければ、お立ち下さい。

〈一同唱和 : I love to tell the story...〉

それから、この頁の下の方は、ミス タルカットの愛唱讃美歌の一つということで、1911年に、先生がその後半生^{こうはんせい}を日本人伝道に捧げて75歳で天に召された時、そのご葬儀にも歌われたものだそうです。これはまた、一人の宣教師に限らず、全て、神により頼む人の人生に対する覚悟—確信の告白とも言えるもので、はじめの讃美歌の裏打ちのようなものとも見えます。こういう確信があるから、そのよろこびを告げ知らせるのに多少の困難に遭遇しても、やってゆけるのだ...と。そしてこの心は、あとに続く代々のミッシヨナリーの先生方—ミス クラークソン、ミス ブラウン、ミス ソール、そしてミス デフォレストへと、守り継がれ、皆さんが、I love to tell the story...と、語るために教え続けた、それがこの学校の歴史を築き上げてきたものです。それで、この歌も歌ってみましょう。...お立ち下さい。

〈一同唱和：いつくしみふかき主の手にひかれて〉

こうして、創立者たちの思いは日々に新たに生かされて、ここで学ぶ人びとに深い影響を与え、その学校は、単に知識・学問の伝達にとどまらず、「人は何のためにそれをするのか」「自分は何のためにここに居るのか」「このことにはどのような意味があるのか」ということを理解し、周囲の人びとの中で自分の役割を果たせるようになるための練習場としての役を果たしてきました。

この創立(者)記念日の行事にしましても、ミス タルカットのお誕生日のお祝いに事よせて、先生に創立当時のお話をしていただく一方、院長ソール先生のお話は、この学校がここまで発展してこられたのは周囲のたくさんの人のお蔭である、従って私たちはこの成果を人びとに返さなければならない。たとえば、地域の人たちのために講演会、音楽会をすとか、必要な校具などを貸し出すことも...という趣旨であったと聞きます。つまり、学校の創立者を称讃し学校の創立を感謝すると共に、その学校の在るべき様^{さま}にも心くばりをする、それがこのお祝いの精神であったことがわかります。

そこで、今日のタイトル、「創立者の衣鉢を継いで歩む」としてみました。その歩みをスライドによってたどることにいたします。消灯おねがいします。

〈暗転。以下文中○囲いの数字は文末収録の写真の番号に相当する。〉

- ① よき音信をたずさえて
- ② 波路をこえて来た人びとの
- ③ 大きな愛を受けて
- ④ たてられたこの^{まな}学び舎
- ⑤ 「神の慈愛を身に受けて
- ⑥ ^{おみなご}女子たちよ ^お怖じ惑わずに
- ⑦ ^{こうべ}頭をあげて立て」と
- ⑧ 謳いつぎ この学び舎

本日のプログラム第1頁の歌。
(2000年10月6日中高部創立記念礼拝の録音から)

小さな学校の創立からこの大学部の実現まで34年。二人の創立者に続いて四人の校長・院長が働きました。明治のはじめ⑨、今からちょうど130年前に来日した二人のアメリカ人婦人宣教師が神戸にはじめた小さな「女学校」を受け継いで、⑩本格的なハイスクール「英和女学校」に育て、1882年の最初の卒業式を準備したミス クラークソン。⑪この英和女学校にカレッジの課程を備え、1894年に Kobe College 即ち「神戸女学院」を誕生させたミス ブラウン。ミス ブラウンのよき協力者として働き⑫、1909年、この College に文部省の専門学校令の適用を得させ、「神戸女学院専門部」に仕上げたミス ソール。学院に「創立者記念日」のならわしが始まったのもこの年のことです。それから10年後の1919年⑬、神戸女学院専門部に「大学部」の称号を得させ、男子並みの「大学令」の適用される日を望んで学院の発展に努めたミス デフォレスト。この先生の院長在任18年目の1933年、この学院は、創立以来⑭58年の間キャンパスを構えてきた神戸の山本通をはなれて、⑮この岡田山にやってきました。今からちょうど70年前のことです。もっとも献堂式が行われたのは1年後の1934年3月で、ちなみにこれは、この学校が、現在の名称「神戸女学院」を名のってちょうど40年目。あの当時正門を飾った石^{いし}ぶ^ふみは、⑯岡田山の谷門に移されて今日^{こんにち}に及びます。

とはいえ、この学校の歩み、歴史的現実、⑰鹿鳴館、大正デモクラシーの頃はとも角、いつも順風満帆だったわけではありません。「けれども、⑱主イエスがひとたび目ざめてお助け下されば...！」

実際、二人の創立者の神戸到着の直前まで、①日本中に「切支丹邪宗門」禁制の高札が立っていたような有様で、儒教道德に基づく封建遺制が根強く、男尊女卑の気風が当たり前のこの国で、女性をして②真の人間性・キリスト教的モラルにめざめさせるには、相当の努力が要りました。もっとも、その活動の手始めが、元来進取の気風に富み明るく開けた神戸であったことは大きな恵みでした。③先生方は学校だけでなく、訪問伝道にも精を出しました。

クラークソン先生の時代は不況で、経済上のやりくりにも悩まされ、夜中に何度も目ざめては会計の帳簿を手に思いあぐねたそうですが、学業は進みました。

また、ブラウン先生の時代の後半、日本の国策はとみに国家主義に傾き④、「キリスト教も女子教育もあるべき状態にない。だからこそ私たちがやらなければ...」と言って、ついに College (神戸女学院) を創ってしまったとか...

ブラウン先生とソール先生の交替の時、1899年に出た「文部省訓令第12号」一政府公認の学校ではいかなる宗教教育宗教行事の類も^{たぐい}やってはいけないという通達は、もともとそれをやりたくて建てられた⑤この学校には、残酷なものでした。そして学院は、「公認されなくても良いから建学以来の教育方針を守る。公認されないことの不利は教育内容の更なる充実によってカバーする」と決断したのでした。まさに、神への忠実と隣人への配慮の実践と言えますが、人目には悲愴な覚悟です。

ところがこれには大きな逃れ場が備えられていました。同じ頃、地方自治体レベルの私立学校令というものが出て、神戸女学院とソール院長は、兵庫県知事によって認可され、日本の教育界に居場所を得たのです。これがやがて10年後に、当時国立大学以外の全ての大学級の学校に与えられた「専門学校」の格で認可されて「神戸女学院専門部」と名のことになり、多分その前祝いのような気持で、のちに創立者記念日となる“The Founder’s Day”というお祝いの会が計画されました。当時ミス タルカットは⑥ご存命でしたから、Memorial—記念という語は入りません。そして集まった学生生徒同窓生たちは、学院の原点を偲び、学院を大切に思う—という気持から、これを、創立を記念する日—創立記念日と称し、やがてこの日を含む一週間が「愛校週」となって、

バザーも、㉕恒例となりました。また、1911年に天に召された“Founder”のためには、墓前礼拝が行われ、㉖今に続いています。ミス タルカットのご命日は11月1日ですが、記念日は相かわらずお誕生日の5月22日で、この扱いは、まるで、クリスマスようです。

この専門部が「大学部」となった㉗のは、これまでの実績の延長上のことで、ちょうどその前年に東京に東京女子大学が創られていますから、すでに関西で女子の最高学府としての実績を積んだこの学校が「大学」となっても別に不思議はなかったのです。とはいえ、政府の教育政策は女子の学校に「大学」の名を許したとしても、1918年に出した「大学令」の適用は男子校だけに限っていました。そこで時の院長デフォレスト先生は、女子の学校のためにも本物の大学令が適用されることを期待して、そのために更なる努力を...と呼びかけていらっしゃいます。教員の充実、施設(寄宿舍)の完備、基本金の充足、そして、立学の、キリスト教精神を守る祈り...

このアピールに応えたのが、アメリカの、ミス ダッドレーを送り出した伝道会支部の会長であった㉘エミリー ホワイト スミスさんをはじめとする有志たちでした。この人たちは、極東の島国でキリスト教に基づく女子の高等教育に力をつくしているこの学校のために、その趣旨に賛同して、Kobe College Corporation という法人を組織して、祈りと募金を捧げて下さることになりました。その伝統は今も続いて、たとえば㉙1995年の大震災の時の励ましのメッセージ ツリーや援助の中にも、「人はかわり世は移れど...」主のみ心になった働きのたのもしさを見ることができるようでしょう。けれどもまずは、今年70周年を祝おうというこの岡田山キャンパスへの移転のために果たされたこの団体の援助協力の大きさとその意味を覚えたいものと思います。

...そういうこともあって...

学校の歴史を語るうえで、その学校の教科課程や教育方針、その基となるべき教育の目的、建学の精神...は重要課題ですが、神戸女学院にとって、「キリスト教に基づく女子教育」という創立以来の根本命題にしっかりと寄りそうもう一つの現象に触れておきましょう。それが、現実の教育の場・学びの庭として

のキャンパスの特性です。

㊾創立以来のキャンパスがどうしても手狭^{てざま}になったことで学院が移転を考えはじめた時、同窓生たちが壮烈な決心をして募金活動に邁進し、明石の犬蔵谷に土地を買って下さいました。そして諸般の事情から移転先がこの西宮の岡田山に決まった時、同窓生方は明石の土地を岡田山購入資金にあてることに快く同意し、また、当時不況に苦しんでいたアメリカにあっても、Kobe College Corporation の熱烈な募金活動があって、新校舎建設が始まったのです。

このキャンパスが世間の注目を浴びているのは、その設計者が㊿ウィリアム メレル ヴォーリズという方だからですが、その実、世間では、この方がキリスト教の宣教師であったことは、しばしば等閑に付されています。けれども、ヴォーリズ氏はこのキャンパスの完成にあたって“Dedication Hymn”という歌を作詞作曲して捧げて下さいました。それはまさに、このキャンパスが仕上がってゆくのを見守っていた時の院長デフォレスト先生の心に浮かんた詩、“Beauty Becomes a College”と同巧異曲なのです。

建築の様式は㊿一般にスパニッシュ ミッション スタイルと呼ばれています。アメリカに移住したスペイン人の持ちこんだ様式をミッシヨナリーがアレンジした—ということかと思いますが、まあ、スペイン、イタリアの辺りを歩きますと、何となくなつかしいものに出会うことがよくあります。

たとえば、㊿図書館の列柱。エンタシス。ももとはギリシャ建築から来たものですが、これは㊿スペインはプラド美術館の入口。また、たとえば、㊿寄宿舎—今は亡き北寮ですが、全部の部屋が南に開けて風通しも良いようにと、四棟を菱形に組み合わせて、まん中が小さな庭になっています。これは㊿スペインの家屋では、菱形ではありませんが、よく見られるものです。

通風採光の配慮とならんで、音楽館の位置を正門入ってすぐの丘の下に決めたのは山肌と木々を自然の防音壁にするためである、とか、㊿渡り廊下に壁をつけることで、風雨にさらされることなく教場間の移動ができる、とか、様々な工夫がこらされているのですが、とりわけ心をそそるのは、キャンパスの中心部、㊿ヴォーリズ氏が Quadrangle と呼んでいる部分で、これこそリベラル

アーツ教育の表象になると言われます。つまり、文科と理科と音楽の学びが知の宝庫である図書館を介して、チャペルで養われる Spirit に支えられ、究極の永遠性に向かって成長してゆく...という図式です。

そして、㉔そのチャペル。小さいながらバラ窓を備えたロマネスク風の礼拝堂の㉕正面には、7本のローソクのステンドグラスがあります。このローソクは、黙示録の7つの教会から来ているということですが、デフォレスト先生はこれに、学院に関わるすべての人びと・部門をあてはめて、思いをこらしていらしたそうです。

そして、㉖このステンドグラスですが、近頃の、中から見ても外から見ても同じ色あいのガラス絵というのとはちょっと違って、外から見ると地味だけれども、外の光を受けて内に輝く...というところ、何やら奥床しいと思うのは、わたくしのひとりよがりでしょうか。

もっとも、ここで建築の技術について語ることは本意ではありません。ただ、この建物にこめられた心を知り、ここで学ぶことの豊かさを味わうことができれば、ヴォーリズ博士もお喜び下さるであろうと思います。

この岡田山キャンパスについて、もう二、三、お伝えしておきたいことがあります。

まず、もうご存知かもしれませんが、㉗藤棚下のレンガに刻まれた十字の印のこと。これは、岸和田のクリスチ안의レンガ屋さんが、その誠実な仕事の証しとして彫りこんだものと言われています。

二つ目は、㉘明治時代の讃美歌作りの功労者で歌う宣教師オルチン師が、このキャンパスの庭作りに貢献して下さったこと。讃美歌作りが庭も作り、家造り・ヴォーリズ氏が讃美歌も作った、この学びの園の多彩さを、ことはぎたいと思うのです。

最後に、㉙つい最近の発見のご報告。明石大蔵谷の地所の境界石が一つ見つかりました。あの土地を買って下さった同窓生への感謝をこめて、そこに置かれていた標石を岡田山に移す—とはデフォレスト先生のお言葉でしたが、多分、のちに測量をし直した時にとりかえられたものでしょう。もう無いものとあき

らめていたのですが...、中井課長が見つけて下さいました。㊤岡田神社に向かつて右の端の、木の切株の間に、一つだけ...

もう70年前のことになります。新校舎の出発は賑わしいものでした。

しかしすでにこの時、世界には戦争の気運が昂まっており、日本も、国家主義、軍国主義の路線にかためられ、アメリカ人が主宰するキリスト教の女学校の立場はこれまでになく厳しいものとなり、㊤還暦を迎えたデフォレスト先生の健康を害^{そこ}ないました。...神戸女学院のミッシヨナリー院長の時代がここで終わります。

けれども、創立者以来の志は、これで終わりにはありませんでした。

予てよりデフォレスト先生の片腕^{かね}として交渉事の矢面に立って下さった㊦副院長・畠中 博先生がその後継者となり、難局を乗り切ることになりました。軍人の横暴に対する先生の武勇伝は数々ありますが、何はともあれ、キリスト教学校の本質を巧みに守ることにかけて、先生は遅れをとりませんでした。

そして、㊧終戦後初のクリスマス。学院は、宝塚に進駐していたアメリカの将校たちを招いて共に礼拝を守り、メサイアを歌いました。

間もなく名誉院長としてお帰りになったデフォレスト先生は、この学校が日本の新しい教育制度のもとで出発するのを、殊に女子大学も男子のそれと同じ資格で出発するのを見届けて、神戸女学院の75年史を書きあげて、今度は本当に引退帰米なさいます。

先生が天に召されたのは㊨、1973年7月2日。神戸女学院が創立100周年を間近にひかえ、学院と Kobe College Corporation とのコンサルテーションが開かれようという時でした。もう、間もなく30年になります。学院が岡田山に移って70年。天上の先生の目に、Beauty は本当に College に成っているでしょうか。先生はかつておっしゃいました。—

「神戸女学院の成功を計り得るものは、統計表でも建物でも学問でもなく、教員、学生、同窓生たちがどの程度までこの標語㊩(愛神愛隣)の精神を具現化しているかであります。得ることの出来るすべての学問、富、社会上の地位、修養機関等は、それらが人間同士の中に神の愛を示し現わす新しい方法となるこ

とによってはじめて、設立者の望みと目的を果たすことになるのであります。」

あかり、おねがいします。

〈照明全開。スライド プロジェクター消灯。〉

以上、この学院の創立以来の歩みとその中心を成す精神をご紹介しました。この最もふさわしい結びが、今のデフォレスト先生のお言葉だと思うのですが、こうした、デフォレスト先生に代表される学院への思いが形をとったと言うべきこの岡田山のキャンパス。それに捧げられた先生の詩、“Beauty Becomes a College”。この詩は、皆様もうよくご存知のように、学院創立の125年目によりみがいり、音楽学部の澤内先生からメロディを与えられ、今や永遠の歌としてこの学園にひびき渡り、未来に向かって飛びたってゆく…。そのところを深く味わいつつ、わたくしたち、一今日、澤内先生、作曲者おん自ら、伴奏のためにおいで下さいましたので一、皆さん、ご一緒に心をこめて歌いましょう。

そしてその後^{あと}続けて、美しい詩編を一つ、ご一緒に朗読して、結びの一この集会の感謝の祈りしたいと思います。これは、デフォレスト先生のご臨終の枕辺に開かれてあった所とも聞いております。それで…わたくし、元来英語は苦手なのですが、今日は敢えて、今日のこの機会をお与え下さった先生方にこの心を捧げるつもりで英語で読んでみたいと思います。ゆっくり読みます。英語のお得意な方も、また得意でない方も、わたくしの気持ちに免じて、寛大にお赦し下さい。

それではまず、我らの新しい歌を…。おねがいします。お立ち下さい。

〈一同唱和：Beauty Becomes a College.〉

そのままで、詩編第23編。

〈一同誦和：The Lord is My Shephard...〉

アーメン。

〈オルガンのレスポンス〉

☆

☆

☆

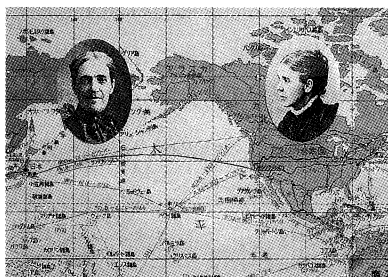
—以下に本日使用のスライドの写真を掲げる。—



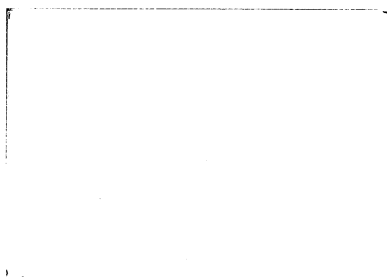
- ① 神、生命の与え主
—創世記・1:27 & 2:7—



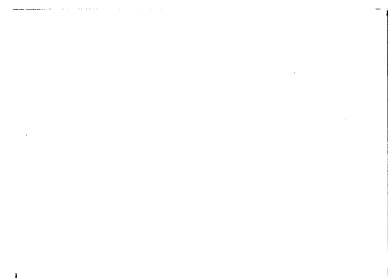
- ④ 神戸に「女学校」誕生
—1875年10月12日—



- ② 創立者、E. タルカット先生と
J. E. ダッドレー先生の来日



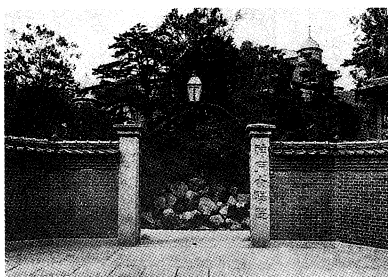
- ⑤ 主イエスの業(わざ)
—パンと魚をふやして民を養う—



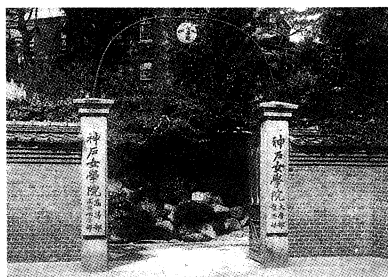
- ③ 主イエスの遺言
—ヨハネ福音書・13:34—



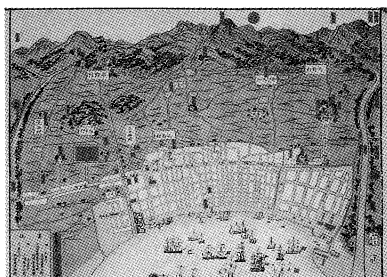
- ⑥ はじめての卒業式
—1882年12月22日—



⑦ 「神戸女学院 Kobe College」誕生
—1894年 3月28日—



⑧ 神戸女学院に大学部誕生
—1919年 4月—



⑨ 居留地のある町の例・神戸
—1869年の地図で見る—

⑩ 第二代校長（一八八〇—一八二〇）
V・A・クラークソン先生



VIRGINIA CLARKSON CADY

⑪ 第三代校長・院長（一八二一—一九九）
E・M・ブラウン先生



⑫ 第四代院長（一八九九—一九一五）
S・A・ソール先生



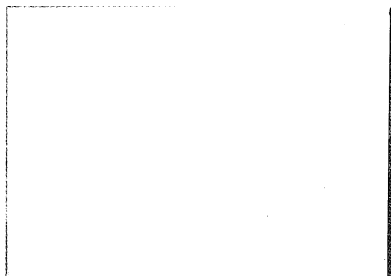
⑬ 第五代院長（一九二五―四〇）
C・B・デフォレスト先生



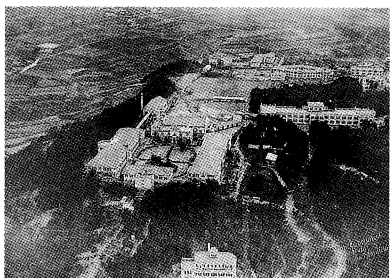
⑭ 現・岡田山学舎谷門の門柱
山本通学舎正門の石ぶみ



⑭ 山本通学舎全景
—移転前—

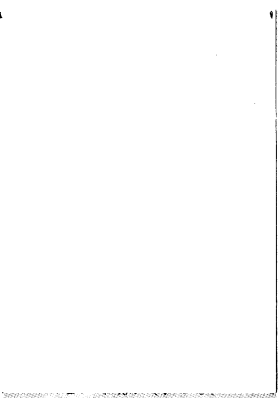


⑮ 欧化主義の時代
鹿鳴館(1833～)の風俗



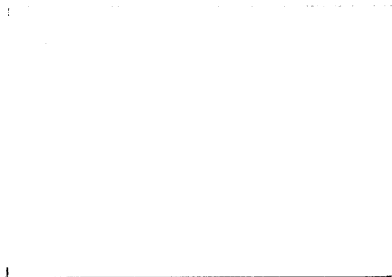
⑮ 岡田山キャンパス航空写真(1)
—1933/34年—

⑯ 反動的国粹主義の時代（一八九〇頃）
さながら「嵐の湖上」の如く…





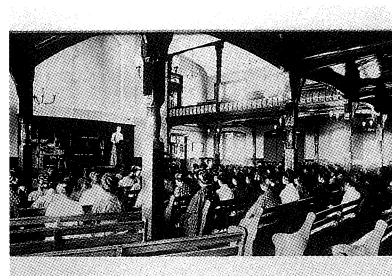
①⑨ 切支丹禁制の高札
(1873年2月撤去発令)



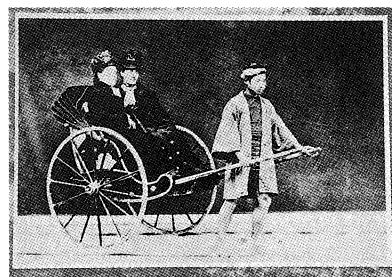
②② 女子学校の危機
—1892年の新聞記事から—



②① J. E. ダッドレー著『育幼艸』より
「学院標語」の原文が見える



②③ 建学の精神を守る
ソール先生の礼拝



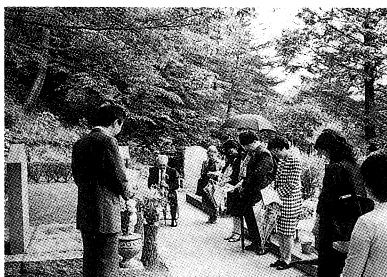
②① 訪問伝道
人力車で遠出



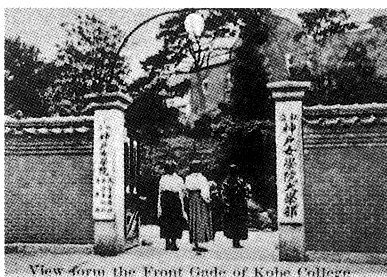
②④ 晩年のタルカット先生
—神戸女子神学校の修養会—



㉔ バザー風景(1922年)
—はじまりは1910年—



㉕ 創立者記念日の墓前礼拝(2000年)
—はじまりは1912年—

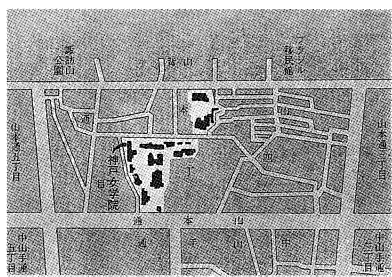


㉖ 神戸女学院大学部認可(cf. ㉔)
石ぶみに木の表札がかかる

㉘
KCCの発起人・終身理事
E・W・スミスさん



㉙
阪神淡路大震災のお見舞
KCCからのメッセーヅツリ



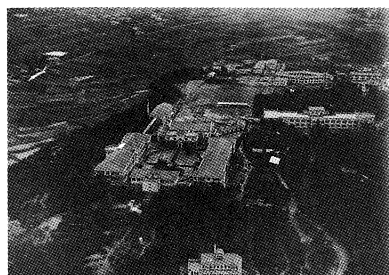
㉚ 山本通キャンパス
—学院付近の略図—

③①

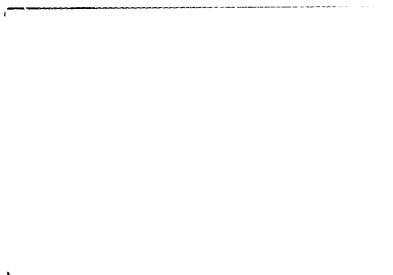
W・M・ヴォーリス博士
岡田山キャンパスの設計者



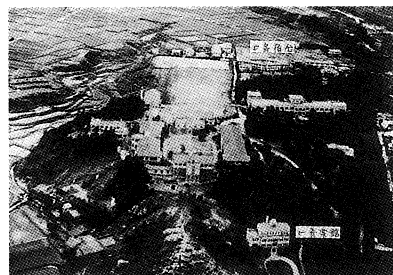
WILLIAM M. VORIES, L.L. D.
Architect
Founder of the Omi Brotherhood,
Omi-Hachiman, Japan



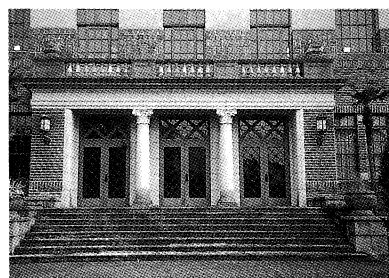
③② 空から見た岡田山キャンパス(1)
—1933/34年—



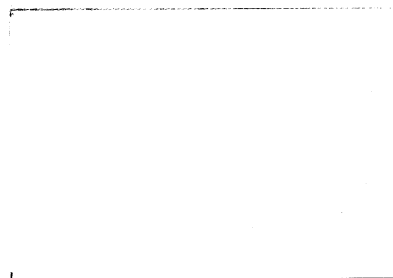
③④ プラド美術館正面



③⑤ 空から見たキャンパス (2)
—音楽館と寄宿舎に注目—



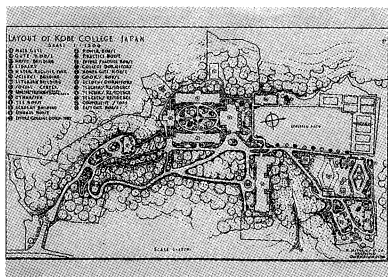
③③ 図書館正面
—列柱—



③⑥ ロヨラのパティオ
—四棟に囲まれた中庭—



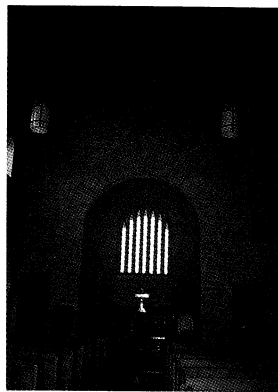
③⑦ 岡田山学舎の渡り廊下
—壁がついている—



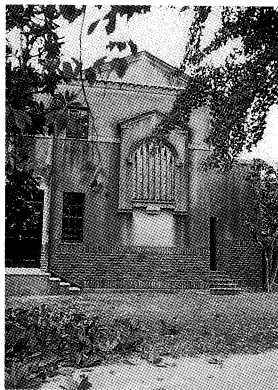
③⑧ ヴォーリズ博士の設計図
—Quadrangle の構想に注目—



③⑨ ソール・チャペル(入口)



④⑩ 七本のローソクのステンドグラス
ソール・チャペル(内部)



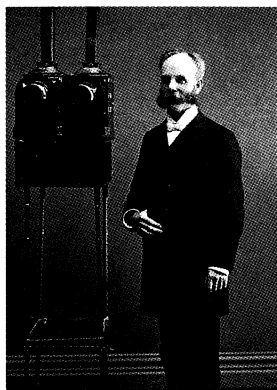
④⑪ ソール・チャペル(背面)



④⑫ 藤棚下のレンガ
—「十」の印が刻まれている—

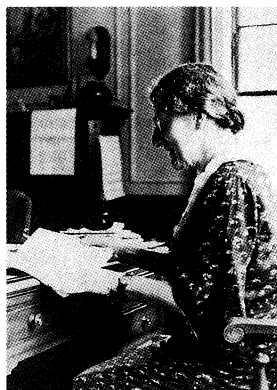
④③

讃美歌を作り造園にも腕をふるった
G・オルチン師と伝道用幻燈機



④⑥

軍国主義さかんな時代に―
還暦の頃のデフォレスト先生



④④ 明石大蔵谷敷地記念の境界石
―三つ葉の紋様が刻まれている―

④⑦

第六代(初の邦人)院長
畠中 博先生(一九四〇～五四)



④⑤ 境界石のありか
岡田神社に向かって右の角



④⑧ 終戦後、初のクリスマス礼拝
米人将校を招きメサイアを歌う

④9

仙台で両親と共にやすむ
デフォレスト先生のお墓



学院の永久標語

⑤0 「女学院の成功を計り得るものは…」



キャンパス移転70周年によせて

岡田山学舎に捧げられた三つの歌

若 山 晴 子

神戸女学院の創立者ミス タルカットとミス ダッドレーは、神戸の町で見かける日本娘たちをいとおしく思い、彼女たちと話がしたくて塾を開き、英語と歌を教えることにしたという。テキストは多分、聖書の易しいお話と讃美歌であった。爾来その(流れをくむ)教場からこれらが絶えたことはない。

それかあらぬか、この学校の人びとは歌が好きで、ただに歌うだけでなく、しばしば思いのたけを歌にして歌った。祝歌であつたり賛歌であつたり団体歌であつたり…。もつとも学生生徒が歌うその大方は、日頃歌いなれた讃美歌の替歌のようなものであつたが、創立記念のような名分のたつ時には、作詞作曲共にオリジナルの歌が作られ、演奏された。

キャンパスの移転という大事業がその対象にならぬわけはない。岡田山学舎の「定礎式の歌」、「落成式の歌」、そして極め付きは設計者ヴォーリズ氏の作詞作曲になる“Dedication Hymn”。今、移転70周年にあたりこれらの歌をよびさまして、学舎にかけられた当時の人びとの思いに心を寄せる機会を供したい。